日本スポーツ社会学会だより

第4号

1993.3.10.

Ⅰ．諸報告
1.第3回理事会報告
Ⅱ．第3回学会大会開催候補地について
Ⅲ．研究ノート
1.今イギリスがおもしろい！ーポストモダンのレジャー・スポーツ論
2.スポーツ社会学会への興味
3.開幕を待つJリーグ
Ⅳ．書評
1.『スポーツの社会学』
Ⅴ．寄贈図書
Ⅵ．ＩＣＳＳ　Ｓｅｍｉｎａｒ　１９９３　開催のお知らせ
Ⅶ．会員異動

発行　日本スポーツ社会学会事務局
〒３０５　つくば市天王台１－１－１
筑波大学体育科学系　スポーツ社会学研究室内
Tel.　0298-53-6370　Fax.　0298-53-6507
振込口座　日本スポーツ社会学会事務局
宇都宮　９－４３９６２

Ⅰ．諸報告

１．第３回日本スポーツ社会学会理事会報告

第３回日本スポーツ社会学会理事会が、１９９２年１２月２２日（火）　午後４時～６時まで、国民生活センター７階会議室にて開催されました。

出席者は、井上、粂野、影山、今村、江刺、小椋、山口、松村（事務局担当）、佐伯の９名。

議事は、以下の通りです。

（１）報告事項

①事務局報告　会員の動向・会費納入状況ー新入会員２０名。（学生会員１名を含む）を加え、２１０名、会費納入者１２２名。未納者には、役員選挙の際に督促状を同封する。

②『スポーツ社会学研究』第１号についてー特別寄稿４編、一般論文４編（内、２編は、採択検討中）、書評１編、その他（第１大会概要、平成３年度体育社会学専門分科会合宿研究会概要、機関誌に関する規定、業績リスト）によって構成される。

機関誌に関する規定の修正提案および頁増加にともなう約１０万円の予算オーバーについては了承された。

③第２回学会大会についてー予定通り準備を進めている。一般発表を公募中。シンポジュウム（ポストモダンのスポーツ）は、唐木邦彦、中村敏雄、亀山佳明の３氏に発表を依頼、コメンテーターとして、矢島ますみ、奥野卓司、清水諭の３氏を依頼。山下会員より要望の出ている英国人研究者の講演の件は、日程の関係等を考慮して、実行委員会で検討中。

④広島アジア大会スポーツ科学会議（Asian Sport Sciences Congress, Hiroshima '94）の後援について　ー同組織委員会から依頼があり、メールで意見を打診した結果、同意書を提出。

⑤その他ー第１回学会大会の会計報告があったが、別会計として扱うことが了承された。

（２）審議事項

①第２回役員選挙についてー規定により、選挙管理委員会の構成及び主な日程が検討され、以下のように決定した。

・選挙管理委員　仲澤　真（帝京大学）、中村祐司（早稲田大学）会員
　開票立会人　　萩原美代子（文化女子大）、松村和則（筑波大学・事務局）
・１月１１日～１４日に公示および投票用紙等発送、１月３１日（消印有効）までに投票。

・被選挙人及び選挙人名簿は、細則に関わらず現有会員名簿に新入会員を加えたものとして行う。（会費未納者にも投票権を認める。）
・会長は、現理事会で推薦し、第２回大会総会で決定する。

②機関誌に関する規定が江刺担当理事より提案され、資料１）のように一部修正の上、了承された。修正箇所は、表題の「規定等」の「等」を削除、キーワードの前に、「邦文および欧文の」を加筆すること、である。また、機関誌のみの購読を希望する者には、３，０００円で配布する。

③「学会だより」の名称および体裁は、しばらく現行のままで行う。

④山下会員から依頼のあった、学会大会の英国人研究者の講演の申し出については、プログラム編成等を配慮して、実行委員会との協議にゆだねる。

⑤学会大会会計は、別会計として扱い、実行委員が責任を持つ。残余金が出た場合は、原則として、次大会会計に繰り入れることが望ましい。

⑥第３回学会大会候補地は、愛知（影山会員）の申し出があるが、学会だよりを通じて公募し、それを待って、次回理事会で検討する。

⑦次回理事会は、学会大会の前日３月２８日夕刻、高松（香川大学）を予定する。

資料１）機関誌『スポーツ社会学研究』の発行に関する規定

日本スポーツ社会学会の機関誌『スポーツ社会学研究』の発行は、当面、以下に述べる編集規定、執筆要項、編集委員会規定によって行います。

Ⅰ　編集規定

１．『スポーツ社会学研究』（英文名：Japan Journal of Sport Sociology　、以下、本誌）は、日本スポーツ社会学会の機関誌であり、当面年１回発行します。
２．本誌の目的は、スポーツ社会学会における理論や知識の発展に寄与すると共に、スポーツ社会学における研究を刺激し促進することにあります。
３．本誌は、原則として、学会会員のスポーツ社会学関係の研究の発表に充てます。
４．本誌の掲載原稿は、投稿と依頼とから成ります。
５．本誌は、論文、研究ノート、書評、業績リスト、その他から構成されます。
６．「論文」は総説と原著論文とからなり、学術論文としての内容と体裁を整えたもので、スポーツ社会学の理論や知識の発展に貢献するような体系的なまとまりを持つ必要があります。
７．「研究ノート」は、スポーツに関する社会調査などの結果を主体にした報告や、スポーツを実践する現場、及びスポーツ社会学を指導する現場からの情報をもとにした研

究報告等です。
8．「書評」は、スポーツ社会学に関連する単行本について、概要を明瞭にする（全部または一部の概要が明瞭である）と共に、その内容に沿った問題提起を含むものです。
9．「業績リスト」は、学会会員の研究業績において、印刷物として発行された著書、論文等の書誌情報のリストです。
10．投稿原稿の採否の決定は、審査結果等をふまえて、編集委員会が行います。

Ⅱ　執筆要項

1．原稿は、横書きとします。原稿用紙は、A4版横書400字詰です。なお、和文ワードプロセッサーで原稿を作成する場合は、A4版縦置き横書きで全角40字20行（但し、欧文綴り及び数値は半角）とします。
2．投稿原稿は、コピー3部を含め、合計4部提出します。
3．論文は、図表等を含めて、16，000字40枚程度です。また、邦文600字以内の要約及び欧文300語以内の要約を添付して下さい。
4．研究ノートは、図表等を含めて、9，000字以内です。また、欧文200語以内の要約を添付して下さい。
なお、書評や業績リスト等の字数は、編集委員会が必要に応じて決めます。
5．欧文による論文や研究ノートの原稿については、基本的に、邦文（日本語文）に準じます。原稿は、A4版のタイプ用紙に、通常の字体を使い、タイプまたはワードプロセッサー書きにします。1ページ27行とし、6，000語程度です。
6．図表等は、別紙にして、本文中への挿入箇所を原稿の余白部分に指定して下さい。
7．原稿には表紙を必ず付け、その表紙に原稿の種類、タイトル、キーワード（3～5語）、執筆者名、執筆者肩書、連絡先等を記入します。
8．掲載論文等の別刷りを希望する寄稿者は、著者校正のときに、その必要部数を朱記して下さい。但し、その費用は全額自己負担です。
9．引用文献の記述の形式は、当面、次ページのようにします。

Ⅲ　編集委員会規定

1．日本スポーツ社会学会は、機関誌『スポーツ社会学研究』を発行するために、編集委員会（以下、本会）を置きます。
2．本会は、編集委員長と編集委員若干名から構成されます。なお、その編集委員長と編集委員は、理事会の議を経て会長が指名します。
3．本会の委員の任期は、理事の任期と同じく2年とします。
4．本会は、会員の投稿原稿の審査のため複数の査読者を委嘱します。
5．本会は、審査報告に基づいて、投稿原稿の採否、修正指示等の措置を決定します。

（付記）1992年度における本会の事務局を、奈良女子大学に置きます。従って、機関誌に関する問い合わせ、原稿の送り先等は、下記にお願いします。

住所：（〒６３０）奈良市北魚屋東町　奈良女子大学文学部体育学教室
氏名：江刺　正吾または菊　幸一

電話：江刺　０７４２－２０－３３４６
菊　０７４２－２０－３３４７
大学の番号案内台　０７４２－２０－３３３０
ＦＡＸ：０７４２－２０－３３０９（文学部事務局）

上記の「編集規定」「執筆要項」及び「編集委員会規定」は、１９９２年3月３０日から施行されます。

佐伯聰夫（庶務担当理事、筑波大学）

Ⅱ．第3回学会大会開催候補地について

上記の理事会報告にあった通り、第3回学会大会の開催候補地を募集しております。候補地として好ましい場所がありましたら、事務局までお知らせください。

Ⅲ．研究ノート

１．今イギリスがおもしろい!-ポストモダンのレジャー・スポーツ論

現代という時代はさまざまに語られる。ポストモダンというのもまたその一つである。しばしばわれわれの目に触れる、この「ポストモダン」という言辞によって表されるのは果して何か。何をとらえるがゆえにこのような時代の自己認識に至るのであろうか。山崎カヲルをひけば、それは規範としてのエインシエントとの絶えざる相克を持つ「モダン＝近代」という時代をのりこえた、それゆえ原点のない時代の自己認識に他ならない。ポストモダンとして示される現代という時代はまさに基準として対比すべき原点のない社会として存在しているのであり、その意味では危機の時代であり同時に様々な発展の可能性を秘めた社会でもある。

そうであるならば、この様な時代においては「モダン」のなかに定立していた既存の諸価値は再び相対化されざるを得ない。事実現代社会は、諸価値の問い直しが既に開始されているのであり、それは近代という時代が立脚していた基盤の問い直しとして特徴づけられる。それらはエコロジーの思潮と運動や、そのように目に見えるものでなくとも、様々な合理性に対する懐疑、豊かさとして捉えられていた現代生活様式の再考として、日常生活意識の水準においても底流としての思想潮流として表れている。

この思潮を包括的に言い表すならば、その一つは間違いなくルネッサンスの復活といいうるような人間中心主義の流れであろう。そこにおいてモダンの諸価値はその起点を問い直されるのである。ごく最近上程された今日という時代を問う著のなかで、米田公則が指

摘するように、現代の社会運動が文化運動としての形態を取るのも、まさにこの時代の転換が諸価値の相対化を促すからに他ならない。その意味では時代は”文化の時代”なのである。（北川　隆吉編「時代の比較社会学」青木書店）

さてそのような中でレジャーやスポーツもこの価値の相対化の波を受けざる得ない。そこにおいて問われるのは、産業主義のカテゴリー（レクリエーション）を超えうる人間的豊かさの内実としてのレジャーであり、そこに実現される「自由の王国」としての論理である。それゆえレジャーやスポーツに関わる理論もまた、人間主義の機軸のもとに新たなる定立を試みなければならないのである。そして同時にそのためにはレジャーに侵犯しているシステム社会の合理性や、より直截なレジャーに行使される権力の問題を浮き彫りにし、その克服の方途を提示しなければならないのである。

さて、今イギリスが面白いというのはまさにこのようなポストモダンの時代状況を切り開くような理論展開が湧出して来ているからである。もちろんこれらの面白さを生み出している源流としてのフーコーやブルデュー、さらにはロラン・バルトなどのフランス思想界の営みは面白いに違いない。さらにはグラムシ主義やアルチュセールなどの構造主義者の作業もさらに面白い。だが一見これらのメルティングポットの様相を呈するイギリスのレジャー・スポーツ研究を貫いているのは、民衆の規範形成力の探求であり、この立脚点に立つがゆえにイギリスの諸研究はいっそう面白いのである。

イギリス社会学の伝統はやはり経験主義の流れであろう。イギリス社会学会はその意味ではグランドセオリーの構築は不得手である。理論的にそこにほころびを見いだすのは比較的たやすい。にもかかわらず、ロックやパンク、そしてサッカー暴動までも含め民衆の独自の意味世界を記述的に照らし出し、そこに管理に抗する民衆の生活世界の可能性を見いだして行こうとする試みは面白いという以上に現代世界を切り開く鍵を示し得るものともなっている。彼らの幾人かはPopular Culture,とMass Cultureを画然と区別する。それはMass Culture という語の響きのなかに、受動的な民衆像、規範形成力をその視野から欠落させる視角を嗅ぎ取るからにほかならない。このようなイギリスCultural Studies の流れが底流に流れるからこそイギリスの研究は面白いのである。

さて、こうしたメルティング・ポットとしてのイギリス・レジャー・スポーツ社会学研究の諸潮流を紹介するのはなかなか難しいが、それらの理論主軸を紹介すればおおむね次のように見ることができようか。第一に、ハーグリーブスに典型的に見られるグラムシ主義の流れをくむヘゲモニー論、第二に、現在は改組されてしまったが、バーミンガム大学の現代文化センター（CCCSグループと通称されているが）の一連の作業、そして第三に、ダニング、ロジェークらのFigurational Sociology,などの潮流を見ることができる。さらに、現在ブライトン大学におかれているLeisure Studies Association （A.Tomulinsonが現在事務局長）がこれらのポットの役割を果たし、諸潮流の融合や論争がここで行われている。

このなかで、ダニングなどのFigurational Sociologyと他の二者は明らかに異なった方向をもっており、相互に論争も行われている。（例えば昨年出版された”Leisure and Sports in Civilising Prosess” Macmillan 参照。）他方、ハーグリーブスとCCCSグループの方は、相互に方法論上の批判があるにもかかわらず、両者は階級権力とスポーツとの関係を焦点づけている点類似の課題を背負っている。ダニング達の作業はエリアスの提起する「文明化論」を理論の枠組みとして採用する以上、そのような階級的権力との関係は浮上

してこない。この点に両者の大きな相違がみられるのである。

にもかかわらず、J・ホーンとD・ジェリーはこれら両者は相補的であると指摘する。なぜか。それは彼らに共通する方法論的特徴が、主体と社会構造の関係的把握、あえて言えば両者の統一的な把握という所にあるからである。ハーグリーブスやCCCSグループはその問題設定の視角から、ヘゲモニー関係の中での労働者階級の規範形成力を浮き彫りにしようと試みる。ここで彼らは主体を階級主体として設定するが、この階級主体という概念設定によって彼らは社会構造と主体との統一的視点を持ち合わせるのである。しかしここで問題となるのはイギリス社会学／社会史で最大のアポリアとして論争されてきている決定論(Determinism) の問題である。ホーンやジェリーが相補的と言うのはここにダニング達、直接にはエリアスの方法論の優位点を見るからである。

おそらくエリアスの方法論の最大の評価点は、個人と社会と媒介的存在として人間関係の網の目＝Human Figulationを戦略的に設定することにある。この発想と戦略はブルデューのハビトゥスと重なりあうが、この戦略項の設定によってエリアスは対立する社会と個人の関係を統一化し得る可能性をもつのである。この方法的な統合の志向はハーグリーブスやCCCSグループの参照するギデンスおいても試みられているのであり、その意味ではこれらのイギリスレジャー・スポーツ社会学の諸思潮は、方法論的に近似した志向性を持っているといえるのである。この点においてホーンやジェリーの”相補的関係”との優れた指摘も理解しうるのである。それゆえ彼らは構造＝機能主義に対し、一様に批判の目を向ける。それは主意主義的行為論を提起しながらも、最終的にはそれをシステム統合としてまとめあげざる得なかったパーソンズの方法論的弱点を認識するがゆえにである。この意味で彼らの方法論は正しくポストモダンとしての新しいパラダイムの提起を生み出す可能性を持ち得ているのである。

さて話が細かなところに落ち込んでしまったが、イギリスが面白いと言うのはまさにこの様に表れている理論状況が、我々の現実的な、あるいはそのための理論的な課題と同一の方向を見いだせるからである。まさに原点のない社会＝ポストモダンの渦中にある我々は、文化の生成の可能性と展望を探ることが課題化されているのであろうし、そのための新たなパースペクティブの定立が求められている。いまイギリスは民衆の側の規範形成力の模索と、機能主義や他方主意主義を乗り越える理論枠組みを開拓しつつある。この意味でイギリスはいま面白いのであり、我々を触発する多くの契機を含んでいるといえるのである。

山下高行（立命館大学）

2．スポーツ社会学会への興味

正月元旦から、恒例のようにテレビに釘づけになるという会員も多かろう。私も、御多分にもれず、その輩である。もちろん画面には、元旦が全日本サッカー選手権、二日、三日と箱根駅伝、四日からはラグビーが映し出されている。そして、私はほとんど目を離さすことなく画面を注視しているのである。

しかし、こうしたスペクテーター・スポーツが何故私たちを引き付けるのだろう。無論年末年始のテレビがパターン化されたバカ騒ぎばかりで見れたものではないということも

一因であろう。しかし、ちょっと気のきいた番組が放送されていたとしても、スポーツ番組の魅力には勝てないのではないだろうか。

ここで資料を一つ。昨年行われたＮＨＫの調査によれば、「テレビでスポーツ番組をみることが好きだ」と答えたものが、全体の８０％にも上った。特に３０代の男性ではその傾向が強く、３０％以上の人が「テレビで見たいスポーツ」としてあげた種目が９種目もあったという。高校野球、大相撲、プロ野球という３大スポーツの人気は勿論のこと、その他の種目の人気も確実に高まっている。

では、なぜ今スポーツが面白いのか。またなぜそれが「テレビによって媒介されたスポーツ」なのか。身の周りの本に目をやれば、何冊かはそうした問題をテーマにしている。たとえば、ゲートマンによれば、スポーツ観賞の動機には、政治的、経済的、社会的、宗教的動機があるという。また、ビレルとロイは、メディア・スポーツの機能を情報機能、統合機能、覚醒機能、逃避機能に分類している。なるほど、欲求の充足という観点から見れば、スペクテーター・スポーツには環境を監視しようという、あるいは仲間づきあいという、また審美的、疑似宗教的体験のためという、さらには賭けやリラックスのためにという動機も存在しているであろう。しかし、こうした機能からは、スペクテーター・スポーツがわれわれを引き付ける面白さを導くことはできない。問題は、スペクテーター・スポーツ経験の意味なのである。

この観点から、興味深い解釈はトンプソンの「プロレスのフレーム分析」と、亀山佳明の「スタジアムの詩学」である。前者は、フレーム転換の妙からプロレス観賞の面白さを解読し、後者はスタジアムの経験を身体の同化作用にみる。しかし、プロレス以外の種目でも、またテレビという箱のなかで展開される未経験のスポーツにも、われわれが面白さを感じるのはなぜなのであろうか。

無論、経験の意味を一元化することはできまい。スペクテーター・スポーツの面白さも多様であり、面白さの分類も必要であろう。種目による分類や、ゲートマンが「代表スポーツ」とよんだ対戦様式による分類、ビレルとロイが行なった競技行為における拡散度による分類を用いて、面白さをいくつかのパターンに分類することができるかもしれない。いずれにしろ、これだけ隆盛をきわめているスペクテーター・スポーツの面白さに対する答えは、まだ十分に提示されているとは思えない。

正直に言うと、以上の疑問はわたしが本学会に入会した理由でもある。御教示を乞いたい。

武重雅文（香川大学）

３．開幕を待つＪリーグ

サッカーのプロリーグ、Ｊリーグが今、話題である。一方で「所詮はブーム。はしゃぎすぎ。」との声も多い。どのくらいはしゃぎすぎなのか、話題の一つ「若い女性の進出」を例にとる。昨年のＪリーグ初の公式戦、Ｊリーグカップで行った調査では、スタンドに足を運ぶ女性のファンはおよそ３割であった。この「３割の女性」のおよそ半数(49.7%)は、お目当ての選手がきわめて限定的でサッカーへの理解もまだ浅い、いわゆるミーハーである。そして、はしゃぎ関連の話題づくりに貢献している。

しかしながら、観戦歴と観戦頻度で新規参入層と定着層を推計した結果からは、全体の3分の1(33.8%)が新規参入である一方、半数弱が(45.1%)定着層であり、女性でも30.9%の定着層があった。(ちなみに、前出の「3割の女性」については、サッカーとの関わりが長い人は「3割もいるのか」と感じ、(大多数が新規参入である)マスコミの人は「3割しかいないのか」といった反応である。)

観戦のスタイルも変わってきており、従来は「直接的スポーツ参与」の流れを汲む観客がおもで、いきおい男性中心の層であった。現役組の若いファンは行き帰りに練習するのかジャージ姿も多い。ひきかえ現在はチアホーンにオリジナルグッズと華やかで、ジャージ姿もいるが南米やヨーロッパのブランドものが目立つ。また、ピアの文化とも言うべき「予約社会の波」がやってきており、トーナメントでは、まだカードが決まらないうちに前売り即日完売となる。

「さすがはプロ化」ということかも知れないが、チケットの価格設定も「新規参入」でなければ馴染みにくいものである。昨年の日本リーグでは800～900円のチケットがJリーグでは2,500～3,500円となった。小生のひいきチームのファンクラブは3,000円で全節(22試合)と天皇杯の決勝大会(全部勝ち残ったので5試合)をみることができたが(ラジオ体操のカードのようなクラブ員証で1試合ごとにスタンプを押してもらうのが楽しみであった。)、そのチームもJリーグでは、信販会社と提携したクレジットカードが会員証となり年会費は36,000円となった。(トレーナー等のオリジナルグッズがつくが)たったの9試合しか見れなくなってしまった。(現在、離脱中。)

良くも悪くもこうした変化にともなった追い風がJリーグに吹いている。他のプロスポーツに比べて、プロとアマの垣根が低いこと、いきおい天皇杯のようにトップの決め方がオープンなこと、さらにワールドカップなど国際的なトップも明快に決められること、また、愛好人口の規模が持つポテンシャル、それに関連して見るスポーツとしてのみ存在していないこと、などサッカーならではとも言える特徴もあり、プロリーグとして成功する要因も多々あると思われる。

しかし一方で、課題もかなり残されている。特に「本来的な意味で地域に根ざすこと」「新規参入組の定着と質的向上を図ること」「(個別性を保ちながらも)チーム間格差を是正していくこと」などがJリーグの重要な課題となろう。

地域に根ざすとは、どういうことか。当然、トップチームのための裾野を広げること、イコール、地域に根ざすことではないはずである。(現状はこうしたサブチームの持ち方が一般的に見える。)地域住民とサッカーとがどういう関わりであれ、サッカーがあることによって生活の質的向上が期待できるあり方が求められている。また、一過性のブームに終わらせないためにも、新規参入組への支援施策が必要である。そして、チーム間格差はまだ大きい。(この2月18日プレスリリースされた「ホームタウンに関する調査」では、地元の認知率が10%を超えていないチームもあった。)(マスメディアにのって)全国区で展開するチーム、地元重視でいくチーム、などチームの特徴はあるが、リーグのお荷物となるチームをつくらぬよう早い時期に対処する必要がある。

興行としての成り立ちとクラブスポーツの理念、この両者は立ち上げ当初はしばしば対立することもあろうが、できれば「急がば廻れ」であってほしい。

そして、「見るスポーツ」を従来のように「するスポーツ」に付随するものとしてだけ

ではなく、新たなスポーツの享受の形態としておさえ、「見るスポーツの普及振興策」、享受の質的向上のためのビジョンづくりが急務のように思われる。

補足：文中のデータは、平成4年9～10月に実査を行ったＪリーグカップの観客に関する調査から援用した。調査は主要７試合における15歳以上の男女個人を対象に訪問留置による質問紙調査法で行い、配布数2,294に対し、回収数は2,141(回収率93.3%)であった。

仲澤　眞（帝京大学）

Ⅳ．書評

『スポーツの社会学』　亀山佳明編　世界思想社　1990年

スポーツがあまりに身近にあるため、自明視されてきたこと、また、スポーツは楽しければいいという一種の判断停止に支配されていたことから、スポーツが心理学、哲学、歴史学、社会学等の専門家達によって語られることが非常に少なかった。本書はそうした動向に逆行したいという著者達の冒険心とスポーツに対するパッションによって動機づけられている。社会学、法社会学、教育社会学、政治学、教育学、そして、スポーツ社会学を専門とする研究者達がそれぞれ独自の視角から光を当て、映し出したスポーツのシルエットは確かにユニークなものである。

本書はⅠ現代社会におけるスポーツ、Ⅱ社会問題とスポーツ、Ⅲスポーツ研究の手がかりの三部から構成されているが、八つの著作を評者なりに三つにくくりなおして紹介してみたい。

亀山、宮崎、佐長の三氏はスポーツが我々の社会においてはC.W.ミルズの言う文化装置として機能しており、これによって再生産されるスポーツのコンテクストが何なのかに気づかせてくれる。亀山氏はC.ギアーツの手法を駆使し、文化装置としてのプロ野球を説明する。スタジアムではグランド上のプレイ（内のゲーム）が観客の行動（外のゲーム）を主導するものの、相互に影響し合う。選手のプレイに観客の保有する身体の動きの図式が重なり合う時、生命に特有な身体リズムが再現され、プロ野球の面白さが見いだされる。白熱した試合で、信じられないような素晴らしいプレイを眼にすると、我々の経験は宗教的体験にも類似した感動（＝出来事）の次元にまで達する。ところで、我々の経験する出来事は不安定で、傷つき易い性質ゆえに他者に語られなければならず、たえず物語化され、定型を持つに至る。私達はこうした多くの物語を介して逆に出来事を経験する感受性を形成する。そして、この物語世界が他の日常的世界のメタ・コードとなるため我々は、必然的にプロ野球の内に日本人特有なエトス見い出すようになるのである。宮崎氏はＴＶがいかにしてマラソンを＜ゲームの物語＞として加工し、映像として我々に送り出しているかについて述べている。また、佐長氏は「神（自然）が人間に与えた苛酷な環境をそっくりそのまま受け入れ、それに耐える自己との戦い」というゴルフのテーマがゴルフテクスト産出の装置となり、日常生活の様々の場面で比喩的に語られるゴルフのテクストを作り出

していることを指摘する。

トンプソン、武重、加野の三氏はスポーツの近代化、近代スポーツの内に潜む矛盾点を相撲、オリンピック、女性スポーツを題材に浮き彫りにしてくれる。まず、トンプソン氏はA.グートマンのスポーツ近代化の指標を手がかりに、日本の相撲の近代化について検証する。その結果、合理化、数量化、記録の追求という点では近代化の歩を進めつつも「逆世俗化」が生じていることを指摘し、スポーツ近代化論修正への可能性を示した。また、武重氏はクーベルタンの掲げたオリンピックの理想と近代スポーツのエートスの間に根本的な対立矛盾が存在しており、マス・デモクラシー状況においてはオリンピックの成功がオリンピックの理想の後退と同値であることを教えてくれる。そして、加野氏はオリンピックにおける女性の参加や活躍を取り上げ、「女性スポーツ」と「近代スポーツ」の間で生じているジレンマを析出する。

上杉氏及び矢野氏の著作は我々が経験している近代スポーツの批判のための手がかりを示唆してくれる。上杉氏は「個人的健康基準」と「社会的健康基準」の二軸によって構成される四つのカテゴリーを提示し、現在、定式化されている＜スポーツ＝健康即ち善＞という枠組みを崩そうとする。社会的基準が個人的基準より優位となることで、人々は不安としての健康、もしくは安心としての病気へと収斂されていく。病気の否定によってしか成立しない健康ゆえに人々は不安を打ち消すためにスポーツへと駆り立てられる。そして氏はこうした状況に対して、生の意味によって裏付けされていないスポーツは自己喪失としてのスポーツであると批判する。スポーツ価値意識に関する研究を精力的に行っている氏ならではの切り口と言えよう。

矢野氏は遊びとはフレイムの名であり、行為レベルでこれを定義できないとし、遊びが発するメッセージとメタメッセージの混同から生じるパラドックスを超えたところ、メタレベルの意味領域に遊びが成立すると指摘する。こうして成立した遊びは日常生活のコミュニケーションを切断し、解釈枠組みを改変し、不断に意味を生み出し、生に輝きを与えるという氏の指摘は、近代化され硬直してしまったスポーツに対する批判の視点を示してくれている。

このように本書は「文化装置としてのスポーツ」「スポーツの近代化とその矛盾」「近代スポーツ批判への視角」を主題としている。が、本当にスポーツはここに語られたのだろうか？という疑問と不満が残る。この思いは我々をスポーツとは何か、編者の言うスポーツの歴史的意味や人々のスポーツ経験といったものは＜スポーツ＞なのかという素朴な疑問に立ち返らせる。文化装置としてのプロ野球はそれがラグビーやサッカーであっても同じものであるように思える。これはスポーツそのものへの切り込みの甘さに起因するものといえるが、＜スポーツ＞を＜社会学＞しようとするとき必ずこうした疑問にさいなまれるのも事実である。その意味で本書は図らずもスポーツ社会学の抱える課題をも浮き彫りにしているといえる。とはいえ、本書がスポーツ社会学に関心を示す者にとって非常に刺激的な書であることには違いない。

藤田紀昭（徳島文理大学）

Ⅴ．寄贈図書

日本スポーツ社会学会に以下の著書が寄贈されておりますので、お知らせいたします。

須田直之；スポーツによる町おこし［その社会学的基礎］，北の街社，1992．

Ⅵ．ＩＣＳＳ－Ｓｅｍｉｎａｒ　１９９３　開催のお知らせ

ＩＣＳＳ（International Committee for Sociology of Sport）の1993年度学会大会が、下記の要領で行われます。奮ってご参加ください。

ＩＣＳＳ－Ｓｅｍｉｎａｒ　１９９３，Ｊｕｎｅ　２９～Ｊｕｌｙ　４

Ｖｉｅｎｎａ，Ａｕｓｔｒｉａ

Ｔｈｅｍｅ：Ｓｐｏｒｔ　ｉｎ　Ｓｐａｃｅ　ａｎｄ　Ｔｉｍｅ

Sport is bound up with space and time. A specific space is adapted in its construction depending on the rules of the sport; time is needed to get to the "sport-space", and to practice sport. Sport is related to the social construction of the space; the same space is used in different ways by different social groups. The way of doing sport and the extent to which it is done depends on time schedules, time consciousness, and the demand of different social systems on the time of the individuum. Space and time are prerequisistes for the sport but at the same time its determinants.

Time and space are part of the social construction of reality. In this sense an analysis has to be made into which way sport and space change in time, how "sport-spaces" are constructed and used, how different time schedules, time management, modes of time consciousness and the control of time effect the involvement in sport; in which way sport influences space and time.

First draft of the program:

Ⅰ. Space, Time and Sport

1. Historical aspects of space, time and sport (G)
2. Social Construction of time and space in sport (G)
3. Intercultural meaning of time and space (W)
4. Time consciouseness and the awareness of space (W)
5. Time, Space and Ethics (W)

Ⅱ. The impact of sport on space and time

1. Time economy of athletes and volunteers (G)

2. Sport and biography (G)
3. Environmental effects of sport (W)
4. Urbanization and regional problems (W)
5. Space, time and individual development (W)

Ⅲ. The social use of space and time

1. Social groups and the use of time and space (G)
2. Social segregation and the segregation of space (G)
3. Sport, Space, and tourism (W)
4. The adaption of the time schedules of different social systems (W)
5. Mobility and the use of space and time in sport (W)

Structure of the Seminar:

1. The focal point of each day will be one of the main topics
2. Each main topic will be introduced by an invited speaker
3. General sessions with presentation of papers and discussions on the above mentioned topics (G)
4. Workshops with round table discussions on selected topics (W)
5. posters

The Seminar will be held at the castle "Wilhelminenberg", Savoyenstraβe 2, 1160 Vienna, Austria, JUne 29 ~ July 4, 1993. The castle is located in the west of Vienna and will provide accommodation, seminar rooms and catering, all in pleasant surroundings.

The 29th is seen as the date of arrival, the 4th as the date of departure (extension possible), and the actual seminar will be held on the 30th, 1st, 2nd and 3rd. Reservations have already been made for the Opera (Don Giovanni) on Wednesday (29th). There is a meeting with the Mayor of Vienna at the City Hall on Thursday, sight-seeing on Friday and a "Heurigenbesuch" (typical Viennese wine "tavern") on saturday.

Abstracts for papers, posters and workshops to be presented at the seminar should be written in English and include:
a) a short summary (not longer than 300 words)
b) purpose of the study
c) methodology
Submission of abstracts should be not later than February 1,1993. Registration

fees for participation are to be US $ 150 up until May 15, 1993, and US $ 200 as from May 16, 1993. The deadline for registration is June 15, 1993. The registration fee has to be payed to Creditanstalt, Aumannplatz,1181 Vienna, Account Nr. 1041-27352/01

The registration fee includes:
ticket for the opera
sight-seeing tours
Heurigenbesuch (wine tavern)
Congress materials
Proceedings (selected papers)

The price for accommodation, breakfast, lunch, dinner and coffee breaks is approximately US $ 80 - 120 per day per person (single and double rooms are available). This is due also for accompanying persons. They are cordially invited to all social events (the package costs US $ 100). Grants are possible for attendies from former East bloc countries, which means that accommodation is free. Inquiries to be directed to the Congress Office (Dr. Otmar Weiss).

Dr. Wolfgang Schulz and Dr. Otmar Weiss are responsible for planning and organizing the seminar. Dr. Weiss' office is serving as Congress Office. All questons, suggestions, abstracts, registrations and communications are to be directed to

Dr. Otmar Weiss
Institut fur Sportwissenschaften
University of Vienna
Auf der Schmelz 6
1150 Vienna, Austria

Telephon: 0043/1/9822661/179
Fax : 0043/1/9822661/131

Registration form

First Name(s): Last name:

Occupation:

Working pLace:

Address:

Telephone: Fax:

Single room o Double room o

Accompanying person
First name(s): Last name:

Presentation yes o no o

Title:

Signature:

First draft of the program:

I. Space, Time and Sport (Dunning)

1. Historical aspects of space, time and sport (G)
   Metcalfe/Angermann-Mocetic
2. Social construction of space and time in sport (G)
   Eichberg/Saeki
3. Intercultural meaning of space and time (W)
   Lim/Ingham
4. Time consciouseness and the awareness of apace (W)
   Kew/Roca
5. Space, time and ethics (W)
   Krawczyk/Peyker

	TUES 29 July	WED 30 July	THURS 1 July	FRI 2 July	SAT 3 July	SUN 4 July
9:00～10:30	A	Opening Ceremony	Introd.	Introd.	G/W	D
10:30～11:00		Coffee Break				E
11:00～12:30	R	Introd.	G	G	G/W	P
12:30～13:30	R	Lunch				A
13:30～15:30	I	G	W	W	G/W	R
15:30～16:00		Coffee Break				T
16:00～18:00	V	W	Poster	Sight	Free	U
18:00～19:00	A	Dinner		Seeing	Dinner	R
	L	Opera	City Hall	Dinner	Wine Tavern	E

Ⅶ．会員異動

＜平成４年度新規会員（'93.2.24現在）＞

江口　潤　　産能大学

海老島　均　　高松高専

及川　好司

大久保　洋子　成蹊大学

大野木　龍太郎　富士フェニックス短期大学

西田　光弘　筑波大学大学院

加藤　朋之　筑波大学大学院

川口　晋一　筑波大学

木村　和彦　電気通信大学

坂上　康博　福島大学

鈴木　知巳

須田　直之　青森大学

[illegible]　知行　天理大学

武重　雅文　香川大学

[illegible]　史泰　松蔭女子学院

谷口　陽子

永木　耕介　兵庫教育大学

中島　信博　東北大学

西山　哲郎　大阪大学人間科学部

野崎　武司　香川大学

橋本　純一　信州大学

[illegible]　基源　韓国江原大学校

[illegible]　建治

前田　和司　　北海道教育大学
　　旭川分校
前田　シン子

村田　雅之

山本　教人　　九州大学

山本　英毅　　日本福祉大学

吉本　佳矢　　筑波大学大学院

（学生会員）
阿部　晃士　　東北大学大学院

高橋　義雄　　東京大学大学院

項　建初　　愛知教育大学大学院

＜住所変更＞
浅沼　道成　　岩手大学

阿部　耕也

甲斐　健人　　筑波大学大学院

佐川　哲也　　大妻女子大学

島崎　仁　　大阪教育大学

清水　諭　　筑波大学

高橋　豪仁　　徳島文理大短大部

田中　励子　　奈良女子大学大学院

[illegible]　[illegible]　筑波大学

[illegible]二　博司　三重大学

矢崎　弥　米沢女子短期大学

[illegible]本　清洋　鹿児島大学

吉田　毅　鳥取大学

上記の方々の他に、住所変更をした方がおられましたら、事務局までご連絡ください。
また、以下の２名の方の住所が不明になっております。心あたりの方は、事務局までご連絡ください。
・大沼義彦
・舩山裕憲

【事務局からの連絡】
２月末日現在で会費未納者が５０名おります。早急に納入くださいますよう、よろしくお願いいたします。

【編集後記】
今年度、この「スポーツ社会学会だより」は３回の発行にとどまりましたが、来年度は学会大会の特集号を含め４回発行したいと思っております。大学院生の編集作業への参加を活発化させ、「研究通信」として認められるようなものにしたいと思っております。
御意見、研究に関する雑感等の寄稿をお待ちしております。

清水　諭（筑波大学）